

群 教 セ	G05 - 03
	平17.228集

日本の音楽に親しむことができる児童の育成 ——日本の伝統的な音楽の鑑賞に体験的な表現活動を取り入れて——

特別研修員 木本 千尋 (吉岡町立明治小学校)

《研究の概要》

本研究は、日本の伝統的な音楽の鑑賞に体験的な表現活動を取り入れることによって、日本の音楽に親しむことができる児童を育成しようとしたものである。箏の体験活動を取り入れ、日本の伝統的な音や音楽に対する興味を高め、意欲をもって鑑賞活動に取り組めるようにした。さらに、生活の中にある日本の音楽や楽器の音を探し試してみる活動を取り入れ、児童が日本の音楽を身近なものとしてとらえることができるようにした。

キーワード 【音楽—小 日本の音楽 鑑賞活動 郷土芸能】

I 主題設定の理由

児童が将来、国際社会の中にあって日本人としての自覚をもって主体的に生きていくことができるための資質や能力を育成することが求められている。そのためには、自国の文化や伝統に対し理解を深めるとともに、誇りをもちそれらを愛する心情を培うことが重要である。

児童が今まで、音楽の授業で学習してきたもの、日常生活の中で耳にしてきたもののほとんどは西洋の音階や楽器による音楽(西洋の音楽)である。児童は、このような音楽に対しては関心を示すが、ふだん聴くことの少ない日本の伝統的な音楽に対してはあまり関心を示さない。授業で聴く機会があっても「なんか変」「よくわからない」といった感想が多く出てくる。児童の身近な生活の中に日本の伝統的な音楽や楽器の音を意識して聴く機会がほとんどないので、実感としてつかみにくいのではないかと考えられる。また、日本の伝統的な音楽や楽器についても知っていることが少ないので、余計に敬遠してしまうのではないかと考えられる。しかし、中には「和風っぽい」「昔っぽい」といった感想も出てくるので、心の中のどこかでは西洋の音楽と日本の音楽とを区別しているようである。

これからの時代を生きる児童には、日本にも素晴らしい音楽や楽器があることを知ってほしいし、日本の伝統的な音楽の雰囲気や楽器の響きを実感として感じ取ってもらいたいと思う。この実践を通して、児童の今まで日本の伝統的な音楽に対してもっていた「なんか変」という感覚から、

「日本にもすてきな音楽があるんだ」「日本の音楽のことをもっと知りたい」というふうに、日本の音楽に対する考え方が少しでも変わってくれればと思う。そして、これから児童が日本の音楽にふれたとき、「これは日本の音楽だ」と聴き分けることができ、親しみをもって聴くことができるようになってほしいと思う。

本研究では、日本の伝統的な音楽や楽器の音に親しむために、鑑賞活動に体験的な表現活動を取り入れることにした。鑑賞活動をする場合、視聴覚機器を使って見たり、聴いたりということが多い。そのような活動だけでは、児童の心の中にその曲のことを長い間とどめておくことは難しいのではないだろうか。特に、日ごろ馴染みのない日本の伝統的な音楽ならばなおさらのことである。そこで、実体験を伴った表現活動をすることによって、その記憶が深く児童の心に刻まれるのではないかと考える。実際に日本の楽器の演奏を体験することで、「自分たちにもできた。」「日本の音楽が奏でられた。」という、曲を聴いただけでは味わうことのできない喜びやおもしろさを味わうことができる。また、鑑賞した曲の一部分を演奏体験することによって、その曲の構成やよさも実感として今まで以上に感じるができるようになる。体験的な表現活動を通して感じ取ったことをもとに再度鑑賞活動を行うことによって、新しい発見をしたり、イメージを広げながら意欲的に学習することができるものとする。さらに、身の回りにある日本の音楽を探したり、演奏を体験する活動を行い、身の回りにたくさんある日本の音楽に目を向けることでより日本の音楽を身近に感

じ取ることができるものとする。

以上のことから、日本の伝統的な音楽の鑑賞に体験的な表現活動を取り入れることによって、日本の音楽に対する興味・関心を高め、日本の音楽に親しむことができる児童を育成できると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

日本の伝統的な音楽の鑑賞に、体験的な表現活動を取り入れることにより、日本の音楽に対して関心を高め、親しむことができる児童が育成できることを、実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

- 1 ゲストティーチャーによる生演奏を聴いたあとで、楽器の演奏を体験する活動を取り入れることにより、日本の伝統的な楽器に対する興味・関心が高まり、その音色や響きの特徴に気付くことができるであろう。
- 2 鑑賞曲の一部分の旋律を演奏する活動を取り入れることにより、その旋律の特徴や曲の雰囲気を感じ取ることができるであろう。
- 3 生活の中にある日本の音楽や楽器の音を探しその中のいくつかを試してみる活動を取り入れることにより、身の回りにある日本の音楽や楽器の音を意識して聴くことができるようになり日本の音楽を身近なものとして感じるようになるであろう。

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 日本の音楽に親しむことができる児童の育成とは

日本の音楽に親しむことができる児童とは、日本の音楽や楽器に興味・関心をもち、響きの特徴や曲の雰囲気を感じ取ったり日本の音楽を身近に感じ取ることができるような児童のことである。

児童は、日本の楽器を体験することによって、音色の美しさや響きの特徴に気づき、興味・関心を高めていくのではないかと考える。日本の伝統的な音楽の鑑賞や体験的な表現活動を通して、自

分たちが今まで抱いてきた日本の音楽に対してのイメージを一新することができるものとする。また、生活の中に日本の音楽や音があることに気付くことができれば、身近な音楽として親しみをもって聴くことができるようになるものとする。

(2) 日本の伝統的な音楽の鑑賞に体験的な表現活動を取り入れるとは

本研究における表現活動は、楽器演奏の技能を向上させることが目的ではなく、実際に楽器に触れることにより、音色や響き、曲の雰囲気を感受することを中心に考え行うものである。ここでは、それを体験的な表現活動とする。

具体的には以下の三つの内容を考えた。

ア ゲストティーチャーによる生演奏を聴いたあとで、楽器を体験する活動を取り入れる

体験的な表現活動として、ほとんどの児童が知っていると思われる日本の楽器として箏を取り上げる。ゲストティーチャーによる生演奏を聴いたあとで、楽器を演奏する活動を行い、日本の伝統的な音楽や楽器の音に興味・関心が高まるようにする。箏は、比較的簡単に音が出せるので、音色に親しんだり、響きを直接肌で感じ取ったりするには適しているものとする。箏を演奏してみると、楽しさや難しさ、音のきれいさ、響きのよさも実感できると考えられる。箏を体験した児童にとっては、その後の日本の伝統的な音楽の鑑賞に興味をもって取り組めるものと思われる。

イ 鑑賞曲の一部分の旋律を自分たちで演奏する活動を行う

鑑賞曲の主な旋律の一部分を取り上げ、それを演奏してみると、旋律の特徴や曲の雰囲気を感受することができる、曲に対する感じ方も変わるのではないかと考える。また、繰り返し練習することでその旋律を覚えることができ、児童にとって鑑賞曲が印象深いものとなるであろう。

ウ 生活の中にある日本の音楽や楽器の音を探しその中のいくつかを試してみる活動を取り入れる

これは、自分たちで調べたり家の人に話を聞いたりしながら、身近なところにある日本の音楽を意識を向けさせるものである。もち寄った情報を交流しあったり、お祭りの太鼓の音や相撲で耳にする「流し」のリズムを疑似体験したりすることで、今まで意識していなかった日本の音や音楽を、身近なものとしてとらえることができるようになるであろう。

2 研究の方法

(1) 授業実践計画

対 象	吉岡町立明治小学校 6年1組 (男子17名 女子17名 計34名)		
題材名	日本の音楽に親しもう	期間	10月 全6時間
抽出児	A男：音楽の学習全般に苦手意識があり、日本の音楽にふれた経験も少ないためあまり興味を示していない。日本の楽器を体験する活動を取り入れることで、日本の楽器の音に興味をもたせ、日本の音楽に対しても興味・関心をもてるようにしていきたい。 B子：歌や器楽、鑑賞など音楽の学習全般にわたって興味・関心が高い。しかし、日本の楽器の演奏経験はない。日本の楽器の音色や響きを感じ取らせることを通して、日本の音楽に親しみがもてるようにしていきたい。		

(2) 検証計画

検証項目	検証の視点	検証の方法
見通し1	ゲストティーチャーによる箏の生演奏を聴いたあとで箏の演奏を体験する活動を取り入れることは、箏に対する興味・関心を高め、その音色や響きの特徴に気付くために有効であったか。	表情や態度の観察 ワークシート ①－1の記述
見通し2	「春の海」の最初の部分の旋律を箏で演奏する活動を取り入れることは、その旋律を覚え、曲の構成や雰囲気を感じ取るために有効であったか。	表情や態度の観察 ワークシート ②－3、4の記述
見通し3	生活の中にある日本の音楽や楽器の音を探し、その中のいくつかを試してみる活動を取り入れることは、意識して聴くといろいろな日本の音楽や音があるということに気付く、日本の音楽を身近なものとして感じることに有効であったか。	表情や態度の観察 ワークシート ③－5、6 ④の記述 発表 演奏

V 研究の展開

1 題材及び題材の考察

題材	日本の音楽に親しもう
考察	本題材は、日本の楽器がもつ音色や響きの特徴、曲のもつ雰囲気をつかみ、日本の音楽に親しめるようになることをねらっている。鑑賞に体験的な表現活動を取り入れることにより、児童は興味・関心をもって日本の伝統的な音楽の鑑賞に取り組めるものとする。 教材について：鑑賞教材としては、「春の海」（宮城道雄 作曲）を取り上げる。日本の楽器の音に親しみをもたせるために鑑賞曲で使われている箏を用い、体験したり簡単な旋律を演奏したりすることによって、音色や響きの特徴、曲の雰囲気、旋律の特徴に気付くことができるであろう。また、身の回りにある日本の音楽や音を集める活動を通して、より日本の音楽を身近に感じ、親しみをもつことができるものとする。なお、ゲストティーチャーによる演奏では、滝廉太郎作曲の「花」をテーマにして坂本勉が編曲した「花変奏曲」を取り上げる。

2 目標及び評価規準

目標	日本の楽器を演奏したり、生活の中にある日本の音や音楽を探す活動を通して、日本の音楽や音に関心を持ち、その雰囲気や音色を感じ取って聴くことができる。		
題評 材価 の規 準	評 価 の 観 点		
	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	エ 鑑賞の能力
	日本の音楽や楽器に関心を持ち、進んで感じ取ったり聴き取ったりし、それを鑑賞活動に生かそうとしている。	日本の伝統的な音楽の雰囲気や楽器の音色を感じ取っている。	日本の伝統的な音楽の響きや楽器の音色に気を付け、全体的に味わって聴きとっている。

学習 活具 動体 にの お評 け価 る規 準	①演奏の様子や楽器に関心をもって聴いている。 ②旋律の特徴を感じ取りながら演奏することに意欲的である。 ③いろいろな日本の音楽や音が身の回りにあることに気付き、進んで聴き取ろうとしている。 ④体験を通して日本の音楽を身近に感じ取ろうとしている。	①箏の音色や響きを感じ取っている。 ②箏と尺八の音色や曲の感じ、旋律の特徴を感じ取っている。	①演奏体験を生かし、二つの楽器のかかわりや曲の雰囲気を感じ取りながら聴いている。
---	---	---	--

3 指導と評価の計画(全6時間予定)

過程	時間	○学習のねらい ・学習活動	支援及び指導上の留意点	おおむね満足できる具体的評価規準 【評価方法】 ○十分満足できると判断できる状況例
日本 の 楽 器 に ふ れ る	1	○箏に関心を持ち、音色や響きの特徴に気付く。 ・ゲストティーチャーによる箏の演奏を聴く。 ・自由に音色や響きを試したり簡単な曲を演奏したりして箏の演奏を体験する。 ・ワークシートに感想を記入する。 (見通し1)	・楽器の特徴だけでなく、箏の音色や響きについても気を付けて聴けるように、聴くときの観点を示しておく。 ・集中して聴けるように、できるだけ楽器の近くに集まって鑑賞できるようにする。 ・楽器や扱い方の説明をし、自由に奏法を試したり簡単な曲(さくらさくら)を演奏できるようにする。 ・音や響き、楽器の様子などいくつか観点を示し、集中して取り組めるようにする。	ア①演奏の様子や楽器に関心をもって聴いている。 【表情や態度の観察 ワークシート①-1の記述】 ○集中して見たり聴いたりしている様子が態度に表れ、ワークシートにもたくさんの内容が書かれている。 イ①箏の音色や響きを感じ取っている。 【表情や態度の観察 ワークシート①-1の記述】 ○いろいろな奏法を試し、箏の音色や響きの特徴について気付いたことがワークシートに書かれている。
伝 統 的 な 日 本 の 音 楽 を 聴 く	2	○「春の海」をCDで鑑賞し、曲の雰囲気をつかむ。 ・楽器の音や曲の感じ、旋律の特徴など観点を示し、気付いたことをワークシートにまとめる。	・必要に応じてDVDを使い、聴覚だけでなく視覚からも自由にまとめられるようにする。 ・鑑賞の観点を先に示し、目当てをもって鑑賞できるようにする。 ・次の学習に生かすために、気付いたことを観点ごとにまとめておくようにする。 ・次時の内容の説明をし、スムーズに次の学習に移れるようにする。	イ②使われている楽器の音色や曲の感じ、旋律の特徴を感じ取っている。 【表情や態度の観察 ワークシート①-2の記述】 ○いろいろな視点から集中して聴き取り、ワークシートにたくさんの内容が書かれている。
	3	○「春の海」の主な旋律を覚え、その特徴を感じ取る。 ・「春の海」の最初の部分を箏を使って演奏する。 ・ワークシートに感想を記入する。	・最初は一人では難しいので二人組で分担をして練習する。 ・曲を弾くのに必要な音のみ調弦した箏を用意する。 ・旋律の特徴や曲の雰囲気だけでなく、箏の旋律と尺八の旋律とのかかわり合いにも目を向けられるように助言する。 ・箏の旋律と尺八の旋律を合わせる活動では、尺八部分は難しいので歌って合わせるようにする。	ア②旋律の特徴を感じ取りながら演奏することに意欲的である。 【表情や態度の観察 ワークシート②-3の記述】 ○旋律の特徴や二つの楽器のかかわり合いを感じながら意欲的に演奏している。
	4	○「春の海」を聴き、曲の構成や情景を感じ取る。 ・体験をもとに情景や曲の構成、箏と尺八の音色や響きに気を付けて聴く。 ・ワークシートに考え	・旋律の表す情景や雰囲気、曲の構成に気付くために、自分たちの体験をもとにして考えるように助言する。 ・二つの楽器のかかわり合い、それぞれの楽器の音色や響きについて聴く観点ははっきりさせておく。	エ①演奏体験を生かし、二つの楽器のかかわりや曲の雰囲気を感じ取りながら聴いている。 【ワークシート②-4の記述】 ○曲の構成や二つの楽器のかかわり合い、旋律の美しさを感じ取りながら全体を聴き、ワークシートにたくさんの内容が書かれている。

		を記入する。 (見通し2)		
		・箏と尺八以外の日本の伝統的な楽器について知る。	・箏と尺八以外にも日本の楽器がたくさんあることを知り、日本の楽器に関心をもてるようにするために、教科書の資料を参考にしながら説明する。	
日本の音楽を 探す	5	○身の回りにはたくさんの日本の音や音楽があることに気付く。 ・探してきた日本の音楽や音をグループごとにまとめ、発表する。 ・発表を聞いて感想をワークシートに記入する。	・音楽だけではなく日本らしい音でも良いとする。 ・発表されたものの中から、実際に体験できそうなものを選んでおく。	ア③いろいろな日本の音楽や音がまわりにあることに気づき、進んで聴き取ろうとしている。 【表情や態度の観察 ワークシート③－5の記述】 ○様々な日本の音楽や音を見つけようとしている様子がわかり、ワークシートにもたくさんの内容が書かれている。
	6	○太鼓のリズムなどを体験し、日本の音楽を身近に感じる。 ・探してきた音の中から体験できるものを体験する。 ・学習のまとめの感想をワークシートに記入する。 (見通し3)	・児童の発表に良い例がない場合は、以下のようなものを提示し意見が出るようにする。 祭りの太鼓 相撲で耳にする「流し」のリズム 「越天楽」の最初のリズム おばけが出てくる様子を表す音 テレビ番組のオープニング音楽 わらべうた 民謡	ア④体験を通して日本の音楽を身近に感じ取ろうとしている。 【表情や態度の観察 ワークシート③－6の記述】 ○日本の音楽や音をこれからの生活の中でも意識して聴いてみようという内容がワークシートに書かれている。

VI 研究の結果と考察

1 ゲストティーチャーによる箏の生演奏を聴いたあとで箏の演奏を体験する活動を取り入れることは、箏に対する興味・関心を高め、その音色や響きの特徴に気付くために有効であったか

児童は一つずつ配られた爪を手に取り、初めてなのでどのように付けたらいいのか友達同士でいろいろ試しながら付けていた。教室に入ってから、準備してあった箏にすぐに興味を示し、指や爪で思い思いに音を出していた。

まず最初に、ゲストティーチャーによる「花変奏曲」の演奏を聴く活動を行った。ゲストティーチャーのすぐ近くに集まり、手の動きを見たり音を聴いたりすることができた。資料1のように児童は真剣な表情で聴き入っていた。すぐ近くで演奏を見られたことで、左手で弦を押すことや爪を使ったりいろいろな奏法があることに気付いたようであった。ゲストティーチャーの演奏が終わると、「すごい」「やってみたい」といったつぶやきがあちこちからあがっていた。また、その場でゲストティーチャーの手の動きをまねしている児童も見られた。

資料1 演奏を聴く児童の様子



その後、実際に箏を体験する活動を行った。初めに、それぞれが自由に音を出したり、奏法を試す時間をもった。児童は楽器に向かうとすぐに見たばかりのゲストティーチャーの演奏をまねしていろいろなやり方で音を出していた。音を出す活動をしてみて「弦がふるえている」「普通の楽器より音が長く続く」「よく響く」「三味線に音が似ている」などの感想をワークシートに記入した。また、ゲストティーチャーの演奏を聴いて「先生の演奏は手が速くてすごかった。」「うまいかなかった。先生はすごく練習していると思った。」という感想を記入した。次に、「さくらさくら」をゲストティーチャーに演奏してもらい、

各自できる範囲で取り組んだ。児童は、楽譜や自分の記憶をたよりにどんどん弾いていった。授業の最後には、ほとんどの児童が弾けるようになっていた。

抽出児A男は、楽器に向かうとすぐにはじからはじまで爪をすべらせ、行ったり来たりしながら音を出していた。また、1本の弦を細かくはじいて音を出したりと、いろいろな音の出し方を試していた。どんな音がするのかよく聴くように助言すると、耳を弦に近づけて音を聴いたり、響きを確認めたりして「よく響く」と答えた。授業が終わっても教室に最後まで残り「面白い」といいながら、一人で楽器をさわって音を出していた。箏の響きの面白さに興味をもったようであった。

抽出児B子は、ゲストティーチャーの演奏で見た左手で弦を押すことに興味をもったようですぐに試しはじめた。弦を左手で押すと音が上がることに気付き、押したり離したりしながら音程が変わることを確かめていた。また、1本の弦を何度もはじき、力を加減しながら音色の変化を確認するようなこともしていた。音色についてたずねると「きれいな音がする。響いている。」と答えた。「さくらさくら」も自分で音を探りながらどんどん演奏していた。教室へ戻る際に「またやりたい。もっとやりたい。」と言っていた。音程や音色の変化に興味をもったようだ。

授業後のワークシートに、A男、B子は資料2のように記入した。

資料2 ワークシートの記述 (上段A男 下段B子)

やたら楽しかった。 よくひびいた。 がさが長かった。
先生の演奏を聴いた時指がはやく動いてくれたし、音もなめらかに 続いてすごかった。 音が太くてさわる感じがした。 やってみてすごく楽しかった。とてもいい音がでるなと感じた。やれてよかった。

以上のことから、ゲストティーチャーによる箏の演奏を聴いたあとで箏の演奏を体験する活動を取り入れることは、箏に対する興味・関心を高め、その音色や響きの特徴に気付くために有効であったと考えられる。

2 「春の海」の最初の部分の旋律を箏で演奏する活動を取り入れることは、その旋律を覚え、曲の構成や雰囲気を感じ取るために有効であったか

まず「春の海」の箏の部分の最初の4小節を、歌って覚えるようにした。同じ旋律が2回繰り返されているので、前時に曲を聴いている児童たちは数回で歌えるようになった。曲を弾くのに必要な音だけを調弦した箏を用意しておき、初めに弾く音の弦だけを児童に示した。一つの旋律を前半部分と後半部分に分けて、二人で分担し、練習を行った。児童は覚えた旋律を手がかりに自分たちで音を探りながら弾いていった。自分たちの歌う旋律に合わせて、「ここは上がって下がるんだ。」「もっと高くまでいくんじゃないか。」などと言いながら練習していた。その後、尺八部分の旋律と合わせる活動を行った。尺八部分は演奏が難しいので、それぞれ歌って合わせるようにした。二つの旋律を合わせることは難しかったようで、箏の演奏と尺八部分の歌がうまく合わないようなところも見られた(資料3)。

資料3 二人組で箏を練習する児童の様子



自分たちが弾いた旋律は何を表しているだろうか、という問いに対して、何人かが「波」「さくらの花が散っているところ」などと答えた。旋律の表している様子や曲の雰囲気を感じ取ることより、弾くことのほうが楽しくて夢中になってしまい、曲の雰囲気をつかむところまでは意識が向けられない児童が多かった。

次の授業で、もう一度「春の海」を鑑賞した。前時で曲の初めの部分を繰り返し練習したことで、ほとんどの児童は最初と最後の部分に同じメロディーが出てくることに気付くことができた。

A男は最初箏をどのように弾いたらいいのかわからない様子だった。教師の歌に合わせてたり組ん

でいる友達と歌ったりしながら、だんだんと旋律が演奏できるようになっていった。自分たちで進んで分担を交換してやっている姿も見られ、何度もやっていくうちに、一人でもできるようになった。また、旋律の最後の音に余韻をもたせるように演奏し、尺八の出だしの部分を少し歌うこともしていた。授業後のワークシートには資料4のように記入していた。

資料4 抽出児A男のワークシート

うまくできて楽しかった。
おぼえられた。

B子も友達と分担してやっていたが、最初はなかなかうまくいかないようだった。教科書を広げ自分達で歌いながら音を見つけ練習していた。何度か練習するうちに一人でもひけるようになり、楽しそうに演奏していた。旋律の雰囲気が出るように演奏を工夫するように話すと、一つ一つの音がばらばらになってしまい思うように旋律が繋がらず苦労している様子だったが、最後の部分をゆっくりといねいに演奏していた。授業後のワークシートには資料5のように記入していた。

資料5 抽出児B子のワークシート

最初は上手にできなかったけど練習をしていたら上手にできるようになった。とても楽しかった。またやりたいと思った。箏の勉強をもっとしたいと思った。
曲は最初の方は大体覚えられた。

A男もB子も何度も繰り返し練習したことで、最初の部分の旋律は覚えられたようである。授業後も口ずさみながら、教室に戻っていく姿が見られた。次時の授業でも、旋律の繰り返しについてはすぐに気付くことができた。

以上のことから、「春の海」の最初の部分の旋律を箏で演奏する活動を取り入れることは、その旋律を覚え、曲の構成をつかむことに有効であった。しかし、曲の雰囲気を感じ取るためには、課題を投げかけるタイミングをうまく捉え、子どもたちが意識して練習に取り組めるような支援を工夫する必要があった。

3 生活の中にある日本の音楽や楽器の音を探し、その中のいくつかを試してみる活動を取り入れることは、意識して聴くといろいろな日本の音楽や音

があるということに気付き、日本の音楽を身近なものとして感じることに有効であったか

『身の回りから聞こえてくる日本の楽器を使った音楽や音を探してみよう』という投げかけで、児童は音探しをしてきた。地域の祭りやコマーシャルのように、自分の知っているものや家族からのインタビューも含めいろいろなところから、それぞれがたくさん集めてくることができた。

日本の音楽や楽器の音を探す活動において、A男とB子がワークシートに記入してきたものは、資料6のとおりである。A男もB子もいろいろなところから探してくることができた。

資料6 抽出児のワークシートより

A男	B子
①祭りの笛 太鼓 ②ファーストフードのCM 三味線 ③フラッシュバック 箏 琵琶 尺八 十七弦 和太鼓 ④獅子舞で篠笛 ⑤ソーラン節	①沼田祇園祭 鉦 篠笛 小鼓 ②歌舞伎 踊りの横で演奏 ③大晦日の特番で太鼓と小鼓でリズム、尺八と篠笛がメロディーを吹いていた ④落語 ⑤沖縄 三線

それぞれが集めてきた情報をグループでまとめ、発表した。自分では気付かなかったものや知らなかったものがあり、いろいろな場面で日本の音楽や楽器が使われていることに驚いている様子であった。また、身近な地域の祭りや行事でも、たくさんの日本の楽器が使われていたことにも驚いたようであった。グループの発表を聞いてのA男とB子の感想は資料7のとおりである。

資料7 ワークシートの記述

A男	太鼓が多い。CMで聞いたのが多かった。
B子	獅子舞や八木節などかわりが深いものを書いている人が多かった。CMも気を付けて聞けば日本の楽器を使っていることがわかった。

次に、発表されたものの中からいくつかを取り上げて体験活動をした。

地域で行われている行事や祭りについてが多かったので取り上げた。獅子舞や八木節については、実際にやっている児童に演奏してもらったり踊っ

てもらったりした。当日のビデオを貸り、視聴もした。自分の住んでいる近くにあっても知らなかったという児童や、知っていたけど見たことがないという児童も多く、興味をもって見ていたようである。

また、2年生の生活科で学習した道祖神のお祭りの太鼓のリズムや篠笛も取り上げ、体験活動をした。太鼓代わりのタイヤと篠笛を用意し、資料8のような活動を行った。児童は興味をもって取り組み、楽しく活動していた。A男もB子も篠笛の体験では、なかなか音は出せなかったが熱心に取り組んでいた。太鼓のリズムはすぐにできるようになり、リズムに乗って楽しそうにたたいていた。

資料8 太鼓のリズムや篠笛の体験活動の様子



コマーシャルやテレビで使われている音楽なども多く出されたので、CDやビデオ、インターネットなどを使って、そこで使われている楽器や音についての確認を行った。

授業後のアンケートからも「気を付けて聞けばこんなにいろいろあるんだ。」という意見が多かった。ほとんどの児童が、日本の音や音楽を進んで探したり、気にしながらテレビを見たりするようになったと答えている。

以上のことから、生活の中にある日本の音楽や楽器の音を探し、試してみる活動を取り入れることは、意識して聴くといろいろな日本の音楽や音があるということに気づき、日本の音楽を身近なものとして感じることに有効であったと考えられる。

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

○ 本研究では体験的な表現活動として、生で演奏を聴いたり実際に音を出したりすることにより、音楽や楽器に対する興味・関心を高めることができた。また、音色や響きの特徴についても、視聴覚機器を使って見たり聴いたりしていた今までの鑑賞活動より、実感として感じ取る

ことができたようである。特に、日本の音楽については地域にある人材や環境を活用しやすい状況にあるので、鑑賞活動の方法の一つとして効果的であると考えられる。

○ 最初に児童が日本の伝統的な音楽に対してもっていた感覚が、興味・関心が高まったり、音色や響き、曲に対する感じ方が深まったり、身近にある日本の音楽の存在に気付いたりするにつれて変わっていった。そして、だんだんと親しみをもって受け止められるようになってきたようである。事後のアンケートからも、「日本の音楽はきれいだと思った。」「これからは気を付けて聞いてみたい。」など、日本の音楽について興味・関心をもったり、親しみをもったりできるようになった児童が多いことがわかった。

○ 今後は、郷土の音楽を含めた日本の音楽を身近に感じることができるようするために、音楽の授業において様々な表現や鑑賞の活動を取り入れるとともに、集会や学校行事の場面でも日本の音楽にふれる機会をもてるよう工夫していきたい。

〈参考文献〉

- ・ 峯岸 創 監修・編 『日本の伝統文化を生かした音楽の指導』 暁教育図書 (2002)
- ・ 清水 宏美 著 『和楽器・日本の音楽を楽しもう』 音楽之友社 (2003)
- ・ 日本学校音楽教育実践学会 編 『日本音楽を学校で教えるということ』 音楽之友社 (2001)